フォトキナ2014報告

報告者　日本カメラ博物館 運営委員　市川泰憲

9月16日～21日まで、ドイツ・ケルンメッセにて「フォトキナ2014」が開催された。開催は西暦の偶数年、1950年が第1回目なので、今回で33回目となる。会場を歩くと2014年はさまざまな記念年であることがわかる。写真術が発明されてから175年、オスカー･バルナックによりUr.ライカが作られて100年、M型のライカM3が発売されてから60周年、さらにケルン・メッセ（見本市会場）がスタートして90年だそうである。細かく写真関連を拾い上げれば、まだあるだろうが、この4つの記念文字は会場で散見することができた。

日本カメラ財団（JCII）では、今回を含め過去7回にわたってフォトキナ会場内で写真展示を行ってきた。2014年は、写真家立木義浩氏の作品「舌出し天使」50点をホール6の特別コーナーに展示した。この写真展示はJCIIだけが行うものではなく、フォトキナ会場だけでもさまざまな団体や企業さらにはギャラリーなどが、30個所で行う規模のものだ。2014年からは、写真を見せるだけでなく、作品を販売する展示コーナーが新たに加わったのが新しい試みだという。

日本カメラ財団は、写真家立木義浩氏「舌出し天使」の作品50点をホール6の特別コーナーに展示

また、フォトキナの開催に合わせて会期中をはさんで、ほぼ同時期にケルン市内のギャラリー78個所で「PHOTOSZENE-FESTIVAL 2014 WALLPAPER」というイベント名で写真展示が行われている。フォトキナというと、機材展という印象が強いが、2012年は未確認だが、少なくとも2010年には同じような展示が街中で繰り広げられていたので、最近はフォトキナと写真展示は併催されているようだ。

ケルンメッセからのファイナルレポートによると、入場者は約185,000人で、このうち47.7%が海外からの来場で、米国、アジアと東南アジア及びオセアニア地域からの来場者が増加傾向にあり、全体では前回並みの来場者数であった。

それでは各社展示から、その主だったところを紹介しよう。

■ライカカメラ社

ドイツといえばライカだ。そのライカカメラ社の展示会場はホール1である。ケルンメッセにはホールが11あり、フォトキナとしては7棟のホー

ライカカメラ社オープニングセレモニーで。右からCEOのAlfred Schope氏、オーナーのAndreas Kafmann氏、アートディレクターのKarin Rehn-Kaufmann氏

ホール１の入場ゲートをくぐると2014年ライカカメラ社の新製品30品を表示した大型パネル。奥のXやCの文字は展示されているシリーズ名を表すコーナーである

写真家作家１人１人に十分なスペースをとった作品展示コーナー。このような個人の展示コーナーが22人分設けられた

フィルムカメラの「ライカM-A」と新ズマリットレンズ4本

「ライカM60」デジタルであるが露出計やAE機構、背面液晶はない

ライカM60には背面液晶モニターはない。電池とメモリーカードは底蓋を外し入る

ルを使っているが、そのうちホール２～５は２階建なので事実上10フロアを使用しているが、すべてのホールを使っているわけではない。ホール１全体をライカカメラ社が使うようになったのは、前回2012年からだ。今回は、その1/3をライカ新製品や関連企業やライカアカデミーなどの紹介に使い、残り2/3を写真家の作品展示コーナーに充てている。この作品展示では、前回は日本人もいたが、今回はみごと日本人作家は１人もいなかった。ライカカメラ社の売り上げに占める日本のポジションは、かつてはアメリカに次ぐものだといわれていたが、最近は弱まっているのだろうか。

そしてライカカメラ社のこのタイミングの新製品は、約30品目にも及ぶとされているが、そのうち目玉となるのは「ライカM 60周年記念モデル」と「ライカM-A」だ。ライカM60は、ステンレスの削り出しボディで、デジタルカメラでありながら、背面液晶、露出機構を廃した特異なモデルだ。

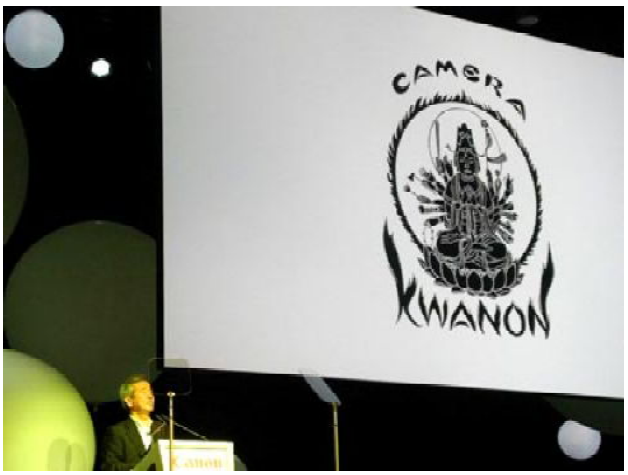
またライカM-Aはフィルムカメラだが、露出機構など電子回路を完全に排除してあり、デザイン、仕様を含めて60年前の“ライカM3”と同等ということになる。ただし、フィルムを巻き上げ、シャッターを押した感触は、数年前までの現行品“ライカM6TTL”と似た感じだ。どちらも記念モデルとしての域は超えていなく、一部ファンに向けたものであることは間違いない。

このほか、M4/3用大型センサーを使ったライカD-Lux、中判でCMOSセンサーとなったライカNewS、35ミリフルサイズ用新ズマリット交換レンズ4本などがあるが、いずれもマイナーチェンジ品であり、新規性はあまり感じさせることはなかった。

また、ライカカメラ社は1988年に本社工場をウエッツラーから近隣の町ゾルムスに移転していたが、2014年の5月には、エルンストライツ社発祥の地であるウエッツラーに戻ってきた。その新本社工場のあるライツパークについても紹介が行われた（ライツパークについては別項で紹介する）。

■キヤノン

2014年はキヤノンのカンノン登場から80周年であることから、最初の試作機とされるカンノンのレプリカモデルと当時の宣伝広告図案などを表に出すなど、歴史あるカメラメーカーを印象づけた。また他社がフォトキナ以前に新製品を発表したのに対し、キヤノンは開幕の前日に新製品をケルンと日本で発表した。このときのカメラ関係の新製品は一眼レフとして「EOS 7D Mark Ⅱ」、1インチ撮像素子を採用したコンパクト機として「パワーショットG7X」、レンズ一体型で1/2.3型CMOSセンサーの高倍機「パワーショットSX60 HS」に加え、EF交換レンズが4本だった。内容的には予定線上



2014 年はキヤノンのカメラの元祖であるカンノン登場から80 周年であると、発表会で挨拶する真栄田雅也事業本部長。カメラ関係の新製品は一眼レフのEOS7DMark Ⅱ、1インチ撮像素子を採用のパワーショットG7X などだと英語でスピーチ

キヤノンカラーである赤で統一したキヤノンブース入り口。女性スタッフの髪もすべて赤で統一されている

手前は「EOS7DMark Ⅱ」のコーナー、奥は「パワーショットG7X」のコーナー。どちらもにぎわっている

の新製品といえ、カンノン登場から80 周年の記念モデルとしては物足りなさが残る。

この交換レンズの中でEF400mmF4 DO ISⅡUSMは、光学系に回折格子を用いて望遠ながら小型化を図ったもので、DOはキヤノンでいうDiffractive Opticsの略であり、DOレンズとしては過去に、2001年発売の「EF400mm F4 DO IS USM」と2004年発売の「EF70-300mmF4-5.6 DO IS USM」があるが、この時期の新製品としてDO レンズを開発発売するのには光学メーカーとしての執念のようなものを感じさせる。ちなみに、他社からは回折格子光学系の通常撮影用のレンズは、製品化されていない。

世界・ヨーロッパ市場でこの1 年ミラーレス機が好調であることを報告するソニーデジタルイメージング事業本部長の石塚茂樹氏

■ソニー

ソニーは、世界市場、とりわけヨーロッパにおいてミラーレス機が好調に推移していることに加え、この時期の新製品としてはオートフォーカスシステムに新たに時間軸を加えた4D システムを採用した「α 6000」、「α 77 Ⅱ」、「α 5100」等があり、すでにミラーレスフルサイズ機として1200 万画素でISO感度109600を誇る「α 7s」、3640万画素の「α 7R」、2430万画素の「α 7」とシリーズ化しており、さらにはスマートフォン用のレンズスタイルカメラの「ILC-QX1」ではαEマウントを採用してレンズ交換式にするなど、レンズ交換式ミラーレス機をAPS-Cからフルサイズまでデザイン・機能別に幅広くラインナップした。

今回はα用レンズとしてフルサイズ用FE、APS-C用のEマウント交換レンズ群をさらに拡充するために、多くの開発中のレンズを発表した。シネ用にFE PZ28-135mmF4G OSS、スチル用にはバリオテッ

ソニーのブースはお客さんと基本的には対面式である

モデル撮影コーナーは男性だけでなく女性の姿も目につく

ニコンブースではプロ写真家によるセミナーが開かれた

ニコンブースの人気はD810とD750

サーT*FE16-35mmF4ZA　OSS、ディスタゴンーT*FE35mmF1.4ZA、FE90mmF2.8マクロG OSS、FE24-240mmF3.5-6.3OSS、FE28mmF2、同FE28mmF2用16mmフィッシュアイコンバーター、同FE28mmF2用21mmウルトラワイドコンバーターなどであるが、ソニーのEマウントフルサイズ13本、APS-C用17本、Aマウントフルサイズ用22本、APS-C用が12本で、2015年には合計64本のレンズがそろう。

このなかで特に注目したのが、FE28mmF2、同FE28mmF2用16mmフィッシュアイコンバーター、同FE28mmF2用21mmウルトラワイドコンバーターの存在だ。フルサイズのソニーFEマウントのフランジバック（FB）は18mmだが、マウントアダプターでライカスクリューマウントの焦点距離35mmより広角のレンズを装着すると、レンズによっては画面周辺部に極端な光量落ちやマゼンタ系への偏色が発生する。これはライカMのFB27.8mmでもテレセントリック系を持たせた光学系をなくてはならないということで、フィルムカメラの時代には考えられなかったことだ。ましてはＦＥ マウントのFB18mmで専用のコンパクトな広角レンズを作るのは難しいのかも知れない。その解決策として出てきたのが、フロントコンバーター形式の広角とフィッシュアイレンズの採用なのだろうか。

なお会場では、これらのレンズやカメラ技術の高さを示すために、フルサイズCMOS用ウエハ基板、硝材、コーティング、超音波モーター、手ブレ補正機構、静止画・動画兼用の開閉速度可変の自動絞り機構、レンズ内リニアモーター、アポダイズド光学系などの技術展示にスペースを割いていた。

■ニコン

ニコンのこの時期の新製品は、高強度の炭素繊維複合素材でモノコックボディを採用して小型・軽量・薄型でフルサイズ初のチルト式背面液晶モニターを搭載した「D750（9月25日発売）」、光学ローパスフィルターレスで、AFを高精度化し、カメラ内部に発生する振動を大幅に低減させ3635万画素の高画素を十分に生かす「D810（7月17日発売）」などだが、すでに発売されてきたベーシック機「D610（2013年10月発売）」と合わせて、いずれもFXフォーマット3桁シリーズのリニューアルモデルであり、ニコンフルサイズ3桁シリーズモデルのラインナップ完成といったところだろう。このうちD810とD750では駆動系ユニットに4個のモーターを実装した前ボディを採用しているとのことだが、カメラ自体が起こす振動を大幅に低減

オリンパスの新製品はOM-D　EM1のシルバーボディ

ライフスタイルに合わせたペンの使い方の提案がなされた

おなじみペンタックスカラーボディの陳列は人目を引いた

水深10mまでの防水アクションカメラ、リコーWG-M1

させるなどスペックに表れない改良は地味ではあるが、一眼レフ高画素機の今後の在り方を示す技術の1つであることは間違いない。

また、交換レンズとして「AF-Sニッコール20mm F1.8G ED（9月25日発売）」を、ニコンFXフォーマット用大口径F値1.8単焦点レンズのシリーズの1本として新たに発表した。これにより超広角から中望遠域まで、AF-Sニッコール85mmF1.8G、AF-Sニッコール50mmF1.8G、AF-Sニッコール50mmF1.8G (Special Edition)、AF-Sニッコール35mmF1.8G ED、AF-Sニッコール28mmF1.8Gなどで6本目となった。

■オリンパス

オリンパスの新製品は、カメラとしては「OM-D EM1（10月発売）」をシルバーボディにしてファームウエアをVer.2としたものだ。このファームウェアVer.2は、パソコンからのカメラコントロール機能を追加したものだが、当然のこととして従来からのOM-D EM1もファームウエアアップにより機能アップとなる。また、マイクロフォーサーズ規格の交換レンズとして「Mズイコー ED40～150mmF2.8PRO（11月発売）」も新製品だ。防塵防滴性能を持ち、開放絞りコンスタントF2.8で、35mm判換算80～300mm相当となる。会場では、9月に発売される自分撮りに特化した“タッチ自分撮り機能”を搭載した「ペンEP-L7」も新製品で、ライフスタイルに合わせた使い方の提案がなされていた。

■リコー

リコーのこの時期の新製品は、スタンダードデジタル一眼レフカメラ「ペンタックスK-S1」である。カメラ機能としては、100％視野のプリズムファインダーで、上位機種に採用されているローパスセレクターと独自の手ブレ補正機構SRを備えているが、最大の特徴は、計9種類のカラーボディをオーダーカラー受注サービスとして受けることだ。このオーダーカラーシステムは、過去にも「ペンタックスQ-S1（全カラー40種）」、「ペンタックスK-50（全カラー120種）」でも行われてきたが、フォトキナ会場でもこのカラーボディの陳列は人目を引いた。また水深10mまでの防水機能をもつアクションカメラ「リコーWG-M1（10月発売）」も新製品だ。ペンタックスとリコーブランドが混在する商品ラインナップだが、この防水仕様のWGブランドはリコーとなっており、すでに発売されている全天球カメラ「シータ」もリコーとなっている。

展示会場の奥では、歴代のペンタックス一眼レフとその時代のペンタックスの放映したモノクロ

スマートフォンに1インチ撮像素子カメラを搭載した「ルミックスCM1」

M4/3用大判撮像素子を使ったLX100

4Kフォトモードは、800万画素のスチル画像を切り出せる

フジフイルムXT-1用高級ズームレンズXF50～140mmF2.8

テレビCFを流していた。

■パナソニック

パナソニックは、スマートフォンに1インチ撮像素子の本格的カメラを搭載した「ルミックスCM1」を参考出品し話題を集めた。このカメラは、その名の通りCMは“コミュニケーションカメラ”を意味するという。ルミックスCM1は、正式にはDMC-CM1と呼び、2000万画素1インチのCMOSを搭載し、一眼レフ並みのカメラ性能をポケットサイズに凝縮というキャッチコピーで登場している。スマホに1インチセンサーカメラ、ライカレンズ搭載で約10万円なら妥当なところだろうと、関係者はいうが、パナソニックそのものが携帯電話から2013年に撤退していること、日本ではSIMカードフリーのスマートフォンの導入は現時点ではないことから、欧米向けのカメラということになる。

このほかパナソニックのフォトキナでの新製品は、M4/3用の大型撮像素子を使ったコンパクトカメラのLX100、ミラーレス一眼のGM5、交換レンズの35～100mmF4-5.6、14mmF2.5などであるが、GH4、FZ1000などをファームウェアアップで4Kフォトモードを追加したのもニュースだ。この4Kフォトモードは、30コマ/秒でA3プリントまで対応の800万画素の画像を切り出せるというものだが、スチルの画像とどのように折り合いをつけていくか、今後のカメラの在り方を示す一例であることには違いはない。

■富士フイルム

富士フイルムのこの時期のデジタルカメラの新製品は11月15日発売の「X100T」、「X30」などだが、ミラーレス機が好調なのを受けて、レンズ交換式の高級機「XT-1」の交換レンズを充実させているのが目についた。特にXF50～140mmF2.8の高級ズームレンズに加え、ボケ味がきれいだとされるXF56mmF1.2のアポダイズドレンズも用意したが、かつてミノルタが、そして現在ソニーが135mmF2.8(T4.5)STFで厚みのある光学ガラスでアポダイズド効果を持たせたが、富士は同様の効果を濃度変化フィルターで持たせるようにしたのが注目される。

富士フイルムは、会期中のマスコミ向け発表会で同社デジタルカメラの欧州市場における立ち位置、シェア、デジタルカメラの新しい考え方、交換レンズシステムの拡充などについての考え方を示していたが、フォトジャーナリストからの要望として新しいフィルムシュミレーションモードとして、渋い発色の「クラシック・クローム」というモードを設けたというのだ。いままでのように、鮮やかさ、ビビッド感でなく、重々しさなどを表現するモードだというが、ベルビアでも、アスティアなどの過去のフィルム名になかった新たなネーミン

富士フイルムは、インスタントフィルムチェキの好調に支えられ実写コーナーは人気で、スペースも広い

発表会におけるサムスンMyoungsop Han部長によるミラーレス機が好調であることの報告

グが注目される。かつてのリバーサルフィルムにはない色調を時代の要求で作り出したのだろうが、フィルムを知らない世代を新たに取り込まなくてはならない時代に来たのかもしれない。デジタルカメラも、かつてのフィルム路線の延長でなく、新たな時代を迎えたのだろう。

なお、富士フイルムはこの時期インスタントフィルムシステムが東アジア地域で好調だと伝えているが、これを裏づけるかのように「チェキ」の展示スペースをかなり広く取り、撮影コーナーを設けて来場者にサービスを行っていた。

■サムスン

今日、デジタルカメラをある開発力をもって製造する企業は、日本勢に加え、韓国のサムスンぐらいだ。サムスンは、2010年にAPS-C判のミラーレス機を最初に開発した企業であり、デジタルカメラ分野では日本市場に参入していないが、海外の市場では少なからずコンパクトカメラ分野では世界のビッグスリーに入っていたはずだ。そんなサムスンを見逃すわけにいかないのは世界中のマスコミも同じだ。今年は、事前に関係方面から発表会の案内があったので、意欲的なものが出るのではないだろうかと予想していところ、ミラーレス機のNX-1がフォトキナ開幕前日に発表された。

APS-C判初の裏面照射方式を採用、2,800万画素のサムスンNX-1。レンズは、新製品50～150mmF2.8S ED OIS

このNX-1は、このフォトキナのタイミングで発表されたカメラの中では、唯一新技術を満載したカメラとなった。その内容は、APS-C判で初の裏面照射方式を採用、2,800万画素、AF連動で15コマ/秒の連写が可能というわけだが、4K動画をワイヤレスでモニターに送る機能を持ったり、バッティングを撮影すると打球の瞬間を写しこめるオートショット機能、さらに高感度ISO25600に対応などが技術的な目新しさだが、一方でこの機種から日本語対応となったのが注目される。そして従来サムスンのデジタルカメラは日本語対応でなかったが、本機から日本語表示を搭載した。この意味は日

バットに当てた瞬間をとらえるオートショット機能

4K動画データをワイヤレスでモニターに送ることができる

画面表示はNX-1から日本語へも対応するようになった

シグマのブース

タムロンブースのショーステージ

本市場への参入の意思の表れととっても問題ないだろう。発表会では、ミラーレスの市場が好調に推移していること、新製品NX-1カメラ以外にも交換レンズの新製品は複数の新製品を投入するなどかなり意欲的だ。

■シグマ

レンズ専業メーカーというよりは、すでにしっかりとカメラ兼業メーカーとなったシグマは、この時期は独自フォビオンセンサーの改良版を使ったレンズシャッター機の「dp2クアトロ」が画素数のわりに高画質だと評判だが、新たにフォトキナ会場では「dp1クアトロ」を披露。外観デザインは、すでに発売されているdp2クアトロと変わらないが、新しく専用のファインダーフードを用意し、独自なデザインスタイルをより強固なものとしている。dp1クアトロは35mm判で28mm相当、dp2クアトロは50mm相当、今後予定されているdp3クアトロは50mmレンズ搭載で75mm相当画角となる。フォビオンセンサーはAPS-Cだが、基本カメラボディとファインダーフードのデザイン、さらに画質を加えて、中判カメラの様相を呈してきた。

このほか、35mm一眼レフ用の交換レンズとして、150-600mmF5-6.3 DG OS HSMが、光学系を変えて“スポーツ”と“コンテンポラリー”と同じ焦点域で2種発表されたのが目新しい。価格的にも高価なスポーツタイプは回転・直進の2つのズーム方式を

タムロンブースのカウンター

もつ。従来この焦点域・F値のズームは、すでにタムロンが先行して、昨今のスポーツやネイチャーフォトブームなどもあり、カメラメーカーの同クラスレンズに対して価格、機能面で確実にある分野を確立しているが、ここにシグマが加わったのだから、より激戦ゾーンとなる。

■タムロン

タムロンはこの時期は開発発表として、フルサイズで15mmの超広角スタートで、F2.8コンスタントF値、手ブレ補正機構対応、超音波モーター駆動レンズとして「SP15-30mmF2.8 Di VC USD」を展示した。タムロンの望遠系ズームはすでに売れ筋製品として150～600mmF5-6.3がラインナップされて

シグマdp1クアトロ

dp クアトロのファインダーフード

2本のシグマ150-600mm F5-6.3 DG OS HSM

タムロンSP15-30mmF2.8 Di VC USD

Otusアポディスタゴン55mmF1.4とOtusアポプラナー85mmF1.4

ツァイスブースのカウンター

Loxiaプラナー50mmF2とLoxiaビオゴン35mmF2

いるので、これからはフルサイズで大口径の広角ズームを狙おうということのようだ。このレンズは、前面にガラスモールドの両面非球面を配置し、また複数の異常低分散ガラスを適切に使うことで、歪曲や倍率色収差を抑制し画面周辺まで高い解像性能が得られるという。また、前面ガラスは大きく曲率もあるために光学フィルターを取り付けることができないので、タムロンとしては初の防汚コーティングが施され、レンズ面に付着した汚れのクリーニングがしやすいという。

■カールツァイス

カールツァイスのスチルカメラ用レンズ新製品は、ツァイスディスタゴン35mmF1.4ZM、ツァイスOtusアポプラナー85mmF1.4、Loxiaビオゴン35mmF2、Loxiaプラナー50mmF2の合計4本だ。このうちZMはいわゆるライカMマウントだが、ビオゴン35mmF2ZMであったのが、大口径のディスタゴン35mmF1.4ZM（2,290US$、2014年第4四半期から発売）となってフルサイズのデジタルカメラに最適化されたようだ。またOtusアポプラナー85mmF1.4（4,490US$、2014年9月発売）は、すでに発売されているOtusアポディスタゴン55mmF1.4に引き続くもので、マウントはニコンF（ZF.2）とキヤノンEF（ZE）マウントが供給される。Loxiaビオゴン35mmF2（1,299US$、2014年第四四半期の終わりに発売）、Loxiaプラナー50mmF2（949US$、2014年10月発売）は、ソニーEマウントのフルサイズ（FEマウント）用マニュアルフォーカスレンズで、電子接点を介して絞り値をExifデータとして伝えられ、絞りリングのクリックあるなしを機械的に切り替えられ、スチルとシネの兼用に設計されている。

ところで、ここまでニュースレリーズや現物を調べていてわかったことは、社名、製品名ともカール・ツァイスでなく、社名はカールツァイスであり、製品名はツァイスだけになっているのだ。しかもレンズ前面の銘板刻まれている“ZEISS”の文字は、ディスタゴン35mmF1.4ZMとLoxiaビオゴン35mmF2、Loxiaプラナー50mmF2に関していうならば従前のものに加えかなりの太文字になっている。いつからか調べてみると、2013年6月にミラーレスAPS-C用新シリーズとしてスタートしたTuit（トゥイート）ではCarl Zeiss、2014年5月にスタートしたフルサイズ一眼レフ用Otus（オータス）ではZEISSとなっているが、書体は細ゴシックのような感じだ。いずれにしてもレンズ名表記は、今後ZEISSだけになったことは間違いない。

スーパーワイドヘリアー
15mmF4.5VM

シルバーとブラック鏡胴のウルトロン
35mmF1.7VM

VM-E クローズフォーカスアダプターに
取り付けられたヘリアー40mmF2.8

ノクトン10mmF0.95

コーワ・プロミナー8.5mmF2.8

■コシナ

コシナは、フォトキナではブースは持っていないが、カールツァイスのレンズに加え、フォクトレンダーのレンズをいくつか新製品としてカールツァイスとフォクトレンダーのドイツのブランドをもつリングフォトのブースに展示していた。

フォクトレンダーブランドでは既存製品の改良型であるが、デジタルに対応させて最後玉の口径を大きくして瞳位置を最適化することにより、ライカマウントのフルサイズでも画面周辺で赤く色づくのを解消したという。対象レンズは、「スーパーワイドヘリアー15mmF4.5VM」、「ウルトロン35mmF1.7VM」だが、フルサイズのライカM、M9、ソニーα7R、α7、α7sなどのユーザーにとっては超広角15mmF4.5のリニューアルは朗報である。またソニーα7用にすでに発売されているVM-Eクローズフォーカスアダプターのヘリコイド部を使うフルサイズ用沈胴「ヘリアー40mmF2.8」なども加わった。さらにマイクロフォーサーズ（M4/3）用に「ノクトン10mmF0.95」、また、カール・ツァイス向けのレンズとしては、ディスタゴン35mmF1.4ZM、オータス85mmF1.4なども新しい。

■興和光学

1954年にカロフレックスオートマットに始まり、1974年発売のコーワスーパー66を最後にカメラ作りから撤退した興和の光学部門の流れをくむ、興和光学は、マイクロ4/3マウントのプロミナー8.5mmF2.8、プロミナー12mmF1.8、プロミナー25mmF1.8と3種のレンズをフォトキナで展示、9月から発売を開始した。興和はカメラ事業から撤退した後も光学部門は、スポッティングスコープ、観光双眼鏡などで名声を得ているが、一般カメラ用の交換レンズ分野への進出は、かつてのシネ向けのプロミナーレンズ以来のことである。ただし、絞り、フォーカスともすべて手動で、外装はブラック、シルバー、グリーンの3色が用意されている。

■ゼニット

ロシア、モスクワ・クラスノゴルスクKMZ製レンズであるが、その展示出品されているレンズはかつてのゼニット用のそのものだ。マウントは、ニコンF、キヤノンEF、M42などフルサイズ用のものが用意されている。それぞれのレンズは、ZENITAR 8mmF3.5、ZENITAR 16mmF2.8、ZENITAR 20mmF2.8、ZENITAR 28mmF2.8、ZENITAR 50mmF2、ZENITAR-2C 50mmF2、HELIOS-44 58mmF2、HELIOS-40-2 85mmF1.5、ZENITAR-1 85mmF1.4、APO-TELEZENITAR 135mmF2.8などである。1942年創立の由緒あるメーカーであるが、光学系としては、かつてのソ連時代のレンズをそのまま引き継いでいるのがほとんどだ。また、ZENITはフィルムカメラ写真の楽しみを提唱する

ゼニタール16mmF2.8

ゼニタール8mmF3.5とゼニタール16mmF2.8

ヘリオス40-2 85mmF1.5

ゼニットブース（ZENIT kmz）

メイヤーオプティックゲルツ80mmF1.8（左）と85mmF1.4（右）

LOMOGRAPHYに向けてNew RUSSAR 20mmF5.6（L39、M)、New Petzvalレンズを OEM供給している。

■Meyer Optik Gorlitz

このレンズもフォトキナ2014で再登場したようだ。もともと1896年にHugo Meyerによりドイツの Gorlitzに設立された名門の光学メーカーだが、1986年に東独のペンタコンに吸収されたのちにも、メイヤーブランドのレンズはいくつか存在していた。しかしこの時期に登場したのは、Meyer-Optik Gorlitzブランドでフルサイズ用80mmF1.8（849ユーロ）と85mmF1.4 Somnium（ヘリオスタイプ、999ユーロ)の2本のレンズである。Somniumはラテン語で夢と訳せるが、いずれもポートレイト用のレンズで木漏れ日のような場所でバックのボケが円形できれいに描写できるというものだ。ドイツ製で、F2.8～5.6の絞りで最高の解像力を示し、デジタルにおける3,600万高画素を十分にカバーし、今後登場が予測される4,500万画素の高画素タイプにも対応できるとされている。

■その他レンズメーカー

本来この項は、新興レンズメーカーとでも小見出しをつけたかったが、新興というカテゴリーだけでは分類できないメーカーもあるために、その他というようにした。

SAMYANG（サムヤン） いま世界で一番伸びているといわれる韓国のレンズメーカーである。ここ数回のフォトキナなどの展示を見ると確実に製品カタログも立派になり、展示スペースも拡大している。2014年のカタログを見ると、スチル用として、フルサイズ、APS-C、M4/3用に7.5～300mmまで14本、シネ用として7.5～85mmまで11本、Tマウントレンズとして500～1300mmまで5本という具合に拡充されている。この時期の新製品は50mmF1.4（6群9枚構成、非球面1枚、ハイブリッド非球面1枚）と12mmF2.8フイッシュアイ（8群12枚、非球面2枚）である。いずれもフルサイズ

サムヤンのブース

サムヤン12mmF2.8フイッシュアイ

キポンIBELUX 40mmF0.85（左）とフルサイズレンズ→M4/3コンバーター（右）

以下のミラーレスを含めたマウントに対応しているが、ピント合わせ、絞りはいずれもマニュアルである。サムヤンとは三洋光学工業であり、CCTV用レンズの製造なども手がけるが、かつての韓国チノンが撤退した後を引き継いだと伝えられる。日本でも発売中。

KIPON（キポン） もともとはマウントアダプターを製造販売する企業であり、社名は正しくは、Shanghai Transvision Photographic Equipment Co.という。KIPON（キポン）は、マウントアダプターのブランドであり、2年ほど前からドイツ企業と共同でHande VisionというブランドでIBELUX 40mmF0.85というAPS-CとM4/3用の交換レンズを製造している。このフォトキナでは、フルサイズのキヤノンEFレンズをM4/3のルミックスに使うためのマウントアダプターを試作している。詳細は不明だが、これを装着すると焦点距離2倍分の画角でなく広角で使え、光学系としては明るくなる。

中一光学（ZHONG YI OPTICS） ミタコン・スピードマスター35mmF0.95、スピードマスター50mmF0.95と大口径な交換レンズ。どちらも7群9枚構成で、35mmのほうはソニーEマウント、M4/3、FujiXに対応するが、50mmのほうはソニーEマウントにしか対応できない。またフルサイズ一眼レフ用には、クリエーターシリーズとして35mmF2（5群7枚）、85mmF2（6群6枚）、135mmF2.8（4群5枚）がある。また0.72倍のリアコンバーターで、フルサイズレンズの画角をそのままAPS-C、M4/3のカメラに使え、F値も最大1段明るくなる「レンズターボアダプター」、シネ用に4Kに対応した「アナモフィックレンズ」なども展示されていた。

中一光学ミタコン・スピードマスター50mmF0.95

キポンのブース。年々広くなってきている

SLR MAGIC（SLRマジック） スチル用ではないが、HyperPrimeCine50mmT0.95（Mマウント）、Apo-Hyper Prime Cine 50mmT2.1（PLマウント）などシネ用レンズが新しい。SLR Magicは、香港のレンズメーカーで、ミラーレス一眼向けのレンズを中心に、「SLR Magic」「ToyLens」というブランドを展開しているが、業務用の高級路線にも進出ということなのだろう。

このほか、Schneider（ドイツ）、MEOPTA（チェコ）などの名門も出展していた。

■ポラロイド（C&A Licensing, LLC）

かつてポラロイドといえば、Dr.ランドが創業したポラロイド社であったが、2008年に米国で破産した後は、米国SAKAR社が2013年のCESでポラロイドブランドの商品を復活させて話題を呼んだが、その後のCES2014では引き続きSAKAR社であったのが、このフォトキナ2014ではC&A Marketing,Inc.

ポラロイドの展示はアクションカメラ「キューブ」がメイン

コダックアラリス社のブース

ポラロイド・ソシアルマチック（C&A Licensing, LLC社）

JKイメージング社の「PIXPRO SMARAT LENS Camera」

の子会社であるC&A Licensing, LLC（米ニュージャジー）にカメラごと移っている。この会社は、リッツカメラ、ウルフカメラ、イメージLLC等を傘下に持つ写真関係の販売会社である。

展示では正方形のプリンター内蔵デジタルカメラ「ポラロイド・ソシアルマチック」が“Photokina STAR”を受賞し、この時期の新製品は、一辺が約3.5cmのアクションカメラ「ポラロイド・キューブ」、「ポラロイドZ2300デジタルインスタントカメラ」だが、このうちキューブを別にすれば、Zink方式プリンター内蔵であり、往年のインスタントカメラを彷彿とさせる。

■コダック（コダックアラリス、JKイメージング）

コダックはこのフォトキナにおいて、本家の流れをくむアラリスがブースを出し、プリントターミナルなどの機器展示を行ったが、タイトルにあるように「Kodak Moments」であり、直接的な製品は目につかなかった。一方、JKイメージングは、2013年1月にコダックとコンシューマー向けデジタル製品のブランドライセンス契約を結んでおり、コダックブランドで多くのデジタルカメラを出しているが、この時期はフルHD撮影が可能で、360°円周パノラマが撮影できるアンドロイドOSのアクションカメラ「PIXPRO SP360」、やはりアンドロイドOSのスマートフォンレンズカメラ「PIXPRO SMARAT LENS Camera」が新製品。

■LYTRO ILLUM（ライトロ・イルム）

スタンフォード大学の研究者が開発した、撮影後にピント位置を変化できるデジタルカメラ。1/1.2型CMOSセンサーに、撮影レンズからの光線を4,000万個のマイクロレンズアレイを通して、1回の撮影でさまざまな方向からの光束をまとめて記録し、撮影後の演算処理により、ピント位置を変えたように出力することができるというものだ。35mm判換算30～250mmF2の光学8倍ズームレンズ

ライトロ社はフォトキナ初参加である

ライトロは普通のスチルカメラとしてとらえるより、新しい画像入力デバイスとして考えたほうが理解しやすい

米国企業であることを前面に打ち出したRELONCH CAMERA

が搭載され、出力画素数は2450 × 1634ピクセルの約400万画素。シャッターは30 ～ 1/4000秒。感度はISO80 ～ 3200。初代モデルは2012年のCESで発表されたが、フォトキナでの展示は今回2014年が初である。2014年末には日本国内でも20万円程度で発売される。

■ RELONCH CAMERA

スマホケースのようにiPhoneをすべり込ませてカメラとして機能させるRELONCH CAMERA。撮像素子はAPS-Cと大型で、35mm判換算45mm相当のF2レンズが付いており、ボケを活かした撮影ができる。米国のベンチャーが企画製造し、2015年後半に499ドルで発売予定。

●感光材料が少し元気に

富士フイルムのインスタント感材であるチェキが好調であることが伝えられているが、このインスタントフィルム関連では、**インポッシブル**（IMPOSSIBLE）の存在が興味深い。ポラロイド名は他社が購入し、デジタルカメラと出力紙などに使用してるが、インポッシブルは世界中にある旧ポラロイドのカメラは1億台と算出して、この旧ポラロイド互換のフィルムを作っている。現在発売中の600シリーズのカラー、モノクロームフィルムに加え、近々自己現像方式のSX-70フィルム、ピールアパート式の8 × 10フィルムを発売する。銀塩ポラロイドファンには朗報だ。

アイホンをカメラの背面に滑り込ませてカメラとして機能

さらにこのフォトキナで確認できたのは、世界の歴史ある感材メーカーがそれなりに、今もなお銀塩感材を製造していることだ。

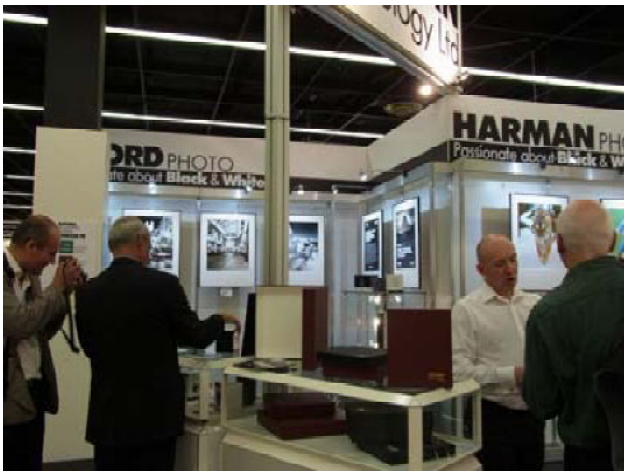
このうち**三菱製紙**（日本）、**ラッキーフィルム**（中国）などは、従来からのカラー感光材料に加え、インクジェットプリント紙も供給している。また**ア**

旧ポラロイド社の銀塩フィルムを製造するインポッシブルの存在がおもしろい。最後発の銀塩感材メーカーだ

デジタル用に加え、従来からの銀塩カラーGRACE Paperを前面に打ち出した三菱製紙のブース

ラッキーフィルム（中国）

アグファフォト（ドイツ）



ハーマンテクノロジー社（イギリス）

イルフォードイメージング・ヨーロッパ社（ドイツ）

グファフォト（ドイツ）は、メモリーカード、インクジェットペーパーなどを販売しているが、黒白フィルム、カラーネガフィルム、カラーリバーサルフィルムも供給している。

また1879年にイギリスで設立されたイルフォード社の製品は、現在もイルフォード（ILFORD）名で販売されているが、黒白フィルム、黒白印画紙を製造・販売するのは、**HARMAN technology社**（イギリス）で、インクジェット用紙を製造・販売するのは**ILFORD Imaging Europe社**（ドイツ）と分化してる。このうちハーマンテクノロジー社は、Kent Mereブランドの黒白フィルムと印画紙、HARMAN.PHOTOブランドのインクジェットペーパーも製造・販売している。イルフォードイメージング・ヨーロッパ社は日本の中外写真薬品とオーストラリアの写真用品販売業者のC.R. Kennedy & Company Pty. Ltd.の出資によるが、元は同じ会社であったのが資本の分化により別会社となったわけである。フォトキナには、両社とも出展していた。

このほか**アドックス**（ADOX、ドイツ）は1860年に創業し、ベルリンの小さな工場で、黒白フィルム、印画紙、処理薬品を製造。**テテナール**（TETENAL、ドイツ）は1847年の創業、カラー、黒白、印刷用

アドックス社（ドイツ）

感材、医療用感材の処理薬品を製造し、インクジェットペーパーを扱っている。**フォマ**（FOMA、チェコ、ボヘミア）、創業は1927年。黒白100/200/400/リバーサルフィルム、100と400は135、35mm（17m、30.5m、50m、305m、610m）、120、シート（4×5in、8×10in、9×12cm、10×15cm、12×16.5cm、13×18cm、18×24cm）、黒白印画紙ではバライタ、RC、さらに号数固定と可変に分かれており種類も豊富。さらにフィルム、印画紙それぞれの処理剤に加えトーニング剤など製造されている。いずれに

テテナール（TETENAL、ドイツ）のブース

フォマ（FOMA、チェコ、ボヘミア）のブース

スマホカメラとしても使えるエルモQBiC　MS-1（日本）

PANONO 球体カメラ（ドイツ）

360°と240°の撮影ができる「360FLY」（ドイツ）

しても日本のフィルムユーザーは、フィルムがなくなると危惧している人が多いが、世界的規模で見れば富士フイルム、コダックはいうまでもなく、アグファ－ゲバルト（ベルギー）、フェラニア（イタリア）などまだまだ製造企業は複数ある。

●新しい動き

アクションカメラともウエラブルカメラとも呼ばれる「GoPro」が登場したのはわずか2年ほど前だが、今回それに引き続く同種のカメラはすでに紹介した「リコーWG-M1」「コダックPIXPRO SP360」「ポラロイド・キューブ」がある。一方「リコーシータ」のように360°の考え方をさらに発展させた機種の登場も新しい。コダックPIXPRO SP360は、名称が示すように360°パノラマ撮影、360°円周撮影ができるが、他社からもさまざまなカメラが登場している。

かつて二眼レフのエルモフレックスや映写機で一世を風靡した名古屋の「エルモ」は、現在はセキュリティーカメラの製造会社としてQBiC MS-1というカメラを展示。このQBiC MS-1は単体で185°超広角カメラだが、スマホに組み合わせればWi-Fi機能でレンズスタイルカメラとして使え、複数個を接合させてパノラマカメラとしても使える。

またPANONO（ドイツ）は、直径11cmの球体の中に36個のカメラがセットされており、球体を上に投げ上げた最高到達点の瞬間を上空からとらえるという特異なカメラだが、専用PCを使えば、その状況をあらゆる角度から見ることができるという。どのような場面でこのようなことが必要になるか、デモ映像を見たが、結婚式の祝福の場で、イベントで人を集客した場などでカメラを投げ上げるというわけだが、その用途は未知数だ。

やはりドイツのAudiovox-Audio-Produkte Gmghの出した「360FLY」という球体の360°撮影可能な61mm138gと小型な防水カメラもある。

これらの個性あふれる各種カメラは、スチルと動画の映像をどのように活用するか、すでに紹介したライトロ・イルムもそうだが、従来からのスチ

ヤシカ銘はシンガポールの業者のコーナーで見つけた

ORWO.net のブースで見つけた巨大パトローネ

ルカメラの概念で考えると無理がある。

●フォトキナ 2014 と市場の変化

フォトキナの全体を分析し報告するには紙面的な限界がある。今回はそのような中で、カメラ全般を見渡すと同時に、レンズ関係と、カメラ・感材メーカーのブランドの動きに注目した。

ポラロイドやコダックなどいくつか製品をご覧になっておわかりのように、すっかりそのブランドに対する新商品（企業）のイメージが定着したものもある。これらの商品は、当然のこととしてやがては日本市場にも進出してくる。前出コダックの PIXPRO SP360 は、マスプロ電工がコダックブランドのアクションカメラ SP-1 と M4/3 のレンズ交換式カメラ PIXPRO S-1 を日本国内で販売を開始した。

イーストマン・コダック社の感光材料事業とドキュメントイメージング事業を引き継いだコダックアラリス・ジャパン社、イーストマン・コダック社の感光材料を販売している加賀ハイテックとそれぞれ分化しているが、ユーザーレベルにとっては、これらの関係を理解するのは大変だ。そして、この時期新しいカメラとして登場したライトロは加賀ハイテックが扱うというのだ。

またレンズ関連では、韓国や中国製を含めてネット通販を通じてほとんどが日本国内で現在購入が可能になっているのも最近の傾向で、ネット通販に関しては写真係の大型量販店も力を入れており、価格もさることながら、配達時間、送料を含めて流通が大きく変化してきているのも現実だ。

もうひとつ、今回のフォトキナ会場で見て気になることは、ポラロイド、コダックに加え、かつての有名ブランドが企業の衰退に伴いどのように変化していくかである。会場を歩いていて気になったのは「YASHICA」のブランドだ。昨年までは、香港系の企業が使っていたが、今回はシンガポールの企業が使っていた。その商品群は、スマートフォン、アクションカメラ、ストロボ、光学フィルターと、以前のような通常のデジタルカメラはない。“YASHICA”と書かれたかつてのコーポレートカラーの青い銘板の下には JAPAN と記されている。ストロボの背面を子細に見ると“Since 1967 JAPAN”とプリントされている。

また会場に、「ORWO」の大きなパトローネを飾った大きなブースを見つけ、オルボフィルムの再来かと思った。会場には、旧アグファのフィルム、ORWO のフィルム、ペンタコンシックスなど一時代を作り上げた旧製品が飾られているが、商品ではない。よく調べると ORWO.net というネットプリント業者だった。その内容は、FotoQUELLE、PixelNet、myfoto などかつての通販業者、ネットプリントサービスなどを集合させたサイトだ。ただ、このオルボ・ネットと、現在も製造が続く映画用の ORWO フィルムの会社と同じかどうかは不明だが、その昔のブランドを活用したビジネスであることには違いない。ちなみに ORWO とは、第 2 次大戦後、東西に分けられたアグファが、東側が元本社のあったボルフェンの製品を Original Wolfen を略してオルボとした。

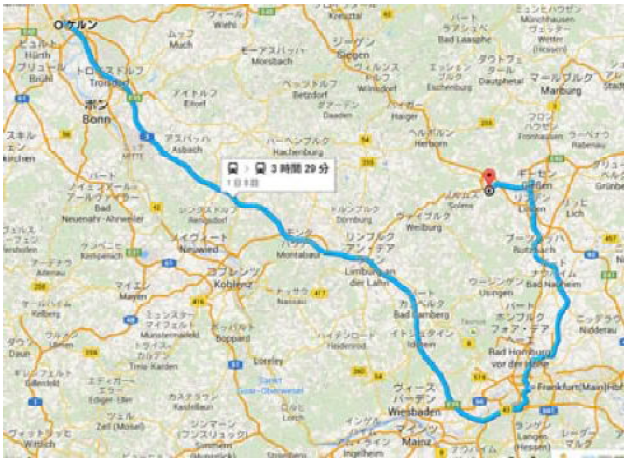
毎年、この時期になるとフォトキナの危機説を唱える人が出てくるが、少なくとも筆者の見る限りそのようなことはない。ただそこにあるのは、写真産業というか、写真業界が大きく変節していることだ。かつてフォトキナといえば、ライカであり、ローライ、コダック、ポラロイドで、日本の企業は、キヤノン、ニコン、富士フイルム、コニカ、ミノルタ、ペンタックスなどであった。

減ったのは参加企業数である。一方でフォトキナの偶数年開催の間に開かれいたフランスのサロン・ド・ラ・フォトは毎年開催となり、米国の PMA@CES に加え、中国、韓国、インドなどでの写真関連のショーも盛んだ。写真産業が拡散したのと同じように、市場も世界に拡散したと考える。

ライカ　生まれ故郷のウエッツラーにもどる

1988 年にウエッツラー近隣の町ゾルムスに移転していたライカカメラ社の本社が、2014 年 5 月にライカカメラ 100 周年を記念して、エルンスト・ライツ社発祥の町であるウエッツラーに 26 年ぶりに戻ってきた。約 27,000 ㎡の敷地は「ライツパーク」と名付けられ、ライカカメラ社の製造、経営管理、カスタマーケア、ライカアカデミーなどの各部門のほか、工場見学コース、ライカストア、ライカギャラリー、フォトスタジオ、レストラン、カフェなどがある。フォトキナを機に、訪れたので紹介しよう。

敬意を表して持参した「ライカ M」をパークの石のモニュメント風のベンチの上に置き新社屋を背景に記念撮影。敷地内には、カフェライツのほか、子会社の ViaCoptic と Weller 建物が別に立つている



ケルンからウエッツラーの町へは、列車で行く場合にはフランクフルト中央駅で乗り換えていくことになるが、時間がかかる。水色の線は鉄道の路線だが、車だとアウトバーンを使い 1 時間半ぐらいで到着する

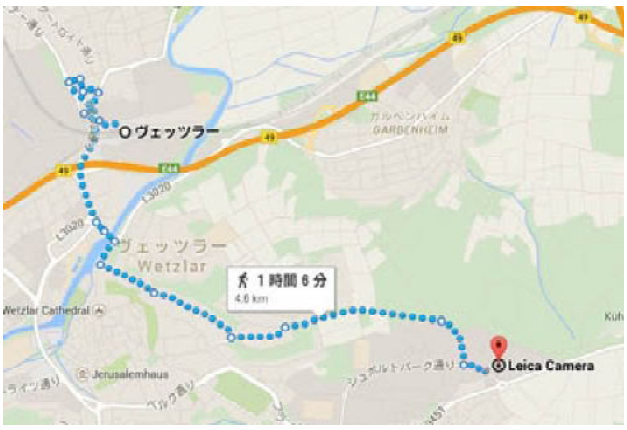
受付はかなり広く、現在行われている写真展の内容やウエルカムメッセージが表示される。左奥がギャラリー

歴史的なライカ製品がかなりの広さで展示されている。かつて名物であったライカツリーは場所が広いのでない

作業している人にライカを見せると笑って応えてくれた

建物外観の印象と異なり、工場の奥行きはかなり深い

旧市街には、かつてのエルンスト・ライツ社の本社屋が建っている。屋上の看板はLeicaとなっているが、現在は顕微鏡のライカマイクロシステムズ社が入る



ライツパークはウエッツラーの駅から5km ぐらい離れていて、丘の上にあるといった感じだ。歩くには少し距離があるので、駅前からタクシーで行くことになる

旧エルンスト・ライツ社の本社前面の道を挟んだところに建つオスカー・バルナックの碑

旧ライツ本社前は、エルンスト・ライツ通りである。ゾルムスの旧本社前はオスカー・バルナック通りだった

かつてオスカー・バルナックがUr. ライカで撮影したアイゼンマルクト広場のライカ100 周年を記念した撮影ポイント

オスカー・バルナックの撮影位置を示すプレートが道路に埋め込まれている。50mm 標準レンズで写すとこんな感じ

ライツパークは土日も10 時から6 時までオープンしており、ライカストアは土曜日が10 時から4 時まで、日曜日はClose。また、製造エリアは週末は稼働していないという。ライカカメラ社の見学は事前に連絡しなくても受付を通さず、ギャラリーやにカメラ展示、見学コースを経て、ライカショップに行くようになってる。ここでは全ライカ製品や、LEICA ロゴ入りT シャツ、マグカップ、キーホルダーなどを始めとしたさまざまなお土産を購入できる。興味の対象にもよるだろうが、約1 時間もあれば、ざっと見学することはできる。

やはりオスカー・バルナックが「ラーン川の氾濫」を撮影した位置から。Leica の文字が洪水時の水位を示している